

enoco[study?]<sub>#2</sub> 報告書

堀川すなお

## enoco[study?]#2 応募の経緯

私は、目の前にある もの その本来の姿を探るため制作をしている。

普段私たちはものの名前を聞いたとき、私たちの頭の中では容易にその形をイメージすることができる。ものの共通のイメージによって私達はコミュニケーションを図っている。しかし、実際にそのものをあらゆる角度、距離から見てみると、今まで気づかなかった多くの部分が見えてきた。私の制作方法は、ひとつのものを数ヶ月間かけてじっくりと見て描く。そして目の前にある もの その本来の姿は一体何か、を多くの視点から描いたドローイングを見せることで問うている。

しかしふと思ったのは、一つのことを私一人の見方を見て描くことは、その結果見えるものは私のももの見方だけになってしまうのではないかということだった。

私は enoco[study?]に参加することで、公の制作場所やワークショップを通じて多くの人と出会い、人はものをどのように見ているのか、ということを探り考えたいと思った。そして、他人のももの見方を自分がものを描く際に応用できれば、今までよりもより広い視野でももの姿を理解できるのではないかと思った。

最後に、一つのことを他者と一緒に捉えることで出てくる相違を展示し、私達が共通に持っていたイメージとは何か、を考えるきっかけを作りたい。そこから私自身、ものの本来の姿をより広い見方で捉えることができるように学びたいと考えた。

滞在制作を行った期間：2014年10月7日-2015年1月18日

展覧会会期：2015年1月10日-24日

## 滞在制作中の実施内容

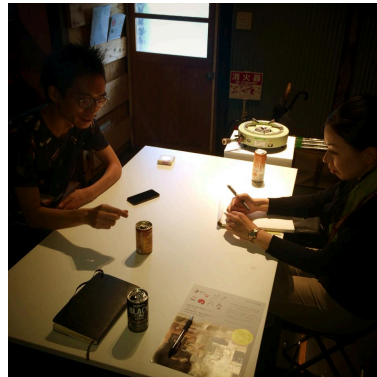
### <リサーチ>

滞在制作、ワークショップ実施の経験がなかったため、プログラムに取り組むにあたってのリサーチを行った。

#### ① アーティストのアトリエ訪問

此花区在住のアーティストのアトリエ訪問を行い、過去に経験したワークショップについてのヒアリングや、アイデアについての意見交換を行った。（協力：吉原啓太、前谷耕太郎）

実施日：10月9日

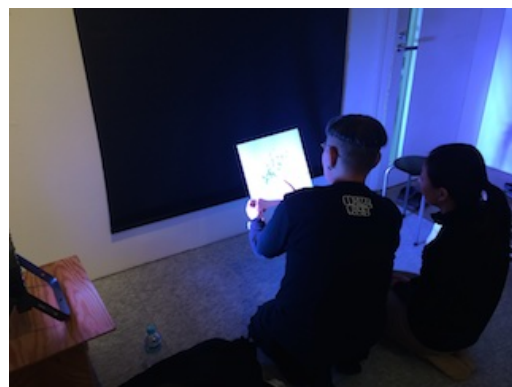


#### ② 現代美術ギャラリーが主催するワークショップへの参加

城東区のギャラリー、Gallery Nomartで開催された展覧会「能勢伊勢雄 ティンクトゥーラ展 – ゲーテ色彩論から」関連イベントのワークショップ（ゲーテ色彩論に基づいて絵画作品の模写を行う）を受講。

目的：ワークショップを受ける側になり、ワークショップの進め方や話し方を見学する。

実施日：11月29日



## <ワークショップ>

(各ワークショップの詳細については、参考資料「enoco [study?] #2滞在制作記録」参照。)

※ 場所の記載のないものについては、すべてenoco館内にて実施。

### ① 「手で見る」

普段知っているものの形を目以外の触覚で理解しようとする、どのような捉え方になるのかを探る試み。

実施日：10月21日,22日,22日,23日,24日,25日,11月7日,14日,12月23日) (参加者23名)



### ② 「他人のものの捉え方を聞き取る」

他者のものの捉え方について、「木津川アート」展覧会会場での会話を通して考察し、理解しようとする試み。(「木津川アート2014」公募作家として参加)

実施日：11月2日-15日 (参加者60名)

場所：木津川市旧漁業組合



### ③ 「言葉で対象を見る」

さまざまな人に言葉でものの形について説明をしてもらい、言葉とイメージの関係を探る試み

1) 同じ環境で生活をしている親子の中の共通の理解を探る。

場所：自宅

実施日：11月月30日日,12月月1日日, 12月月2日日 (参加者2名：父、母)

2) コミュニケーションの道具としての言葉を用い、ものの表し方とその捉え方を探る。

場所：大阪府立みどり清朋高等学校

実施日：12月12日, 22日（参加者24名：美術選択2,3年生）



3) 国籍や言語が異なるとものの捉え方に变化があるのかを探る。(メールでの聞き取り調査)

実施日：12月後半（4人：日本人、アメリカ人、ドイツ人）

4) 自分自身でものの形を観察し言葉で書き留る、それを数日後に読んでものの形を再現する。

実施日：12月後半

### <中間レビュー>

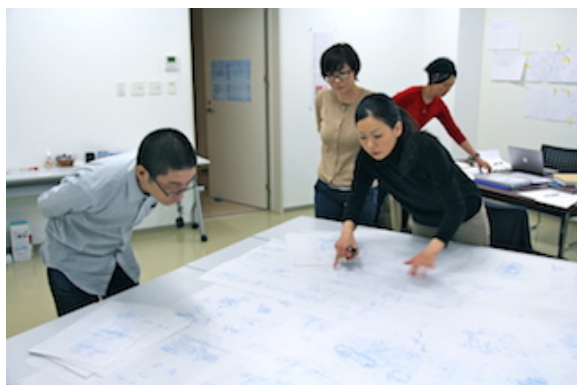
今までの取り組みについて説明し、後半の制作や展示について話を行った。

私は普段の制作時のモチーフの選択について”私たちが日常でよく目にするもので且つ単純なイメージをそのものについて持っている”という基準を設定していたが、今後の制作においてモチーフの選択をより深く考える事で制作の柱としている「目の前にあるもの その本来の姿はなにか？」を問う事により近づけるのではないかと意見を受けた。

実施日：11月29日（一般参加者4名）

審査員：平田剛志氏（京都国立近代美術館研究補佐員、つくるビルアドバイザー）

宮本典子氏（アートマネジメント・コンサルティング office N 代表/ART OSAKA事務局）



### <アトリエ公開>

来館者と会話をする中で、ワークショップ2「他人のものの捉え方を聞き取る」と同様に他者のものの捉え方を会話の中で探った。

実施日：2014年12月4,5,6,7,9,10,13,14,16,17日（参加者25名）



### 展覧会 解釈と行為 SEEING AND PRACTICING

#### <展覧会概要>

今回の3ヶ月で行った5つのワークショップとワークショップに至るまでの思考段階でのドローイング、そして今回の展示に関連のある過去作品を展示。開催中は展示会場に滞在し、ワークショップ2「他人のものの捉え方を聞き取る」と同様に他者のものの捉え方を会話の中で探った。展覧会期間中は、江之子島館内を訪れた、普段現代美術の展示を見に行かれない属性の方にも作品を鑑賞していただき、新鮮な意見を伺う事ができた。

会期：2015年1月10日-24日

会場：江之子島文化芸術想像センターroom2

来場者数：180名



## <アーティストトーク>

2008年から一貫して行っている「目の前にあるもの その本来の姿はなにか？」をどのように進めてきたのかをスライドを用いて紹介。その後、実際の展示会場で今回の発展や気づきを話し、質疑応答や個人的な話合いを行った。質疑応答では、中間レビュー同様にモチーフの選び方についての意見を伺った。

実施日時：2015年1月17日 17:00-18:00

参加者数：17名

会場：江之子島文化芸術想像センターライブラリー



## 掲載等

- ・ 日本経済新聞 夕刊「夕刊文化・展覧会」（2015年1月20日発行）
- ・ 執筆者：池上司（西宮市大谷記念美術館 学芸員）

**展覧会**

■ 堀川すなお個展「解釈と行為」

大阪府西区の大府立江之子島文化芸術創造センターe nocoで、堀川すなおの個展「解釈と行為」が開かれていく（24日まで）。

堀川は2012年京都芸大大学院油画専攻を修了。若手作家の登壇門であるVOCA展や水戸芸術館現代美術ギャラリーの「クリテリウム」に取り上げられるなど、活躍の場を広げている。近年の制作で特徴的なのは、一定のルールを設けてドローイングを行っている点だ。

たとえば、13年から14年にかけて取り組んだ「モチーフを観察して描く」というシリーズでは、「1つのモチーフを色々な角度や距離から観察する」「目で見えたとおりに描く」という約束事に基づいて、

一定のルールを設けて描かれたドローイングを展示する

**製図のような独特な作風**

これは一種の抽象化の作業であるが、その背後には対象のどの部分を導き出すかという主観の入り込む余地が残されている。堀川の場合は色や触感ではなく、構造と細部が関心事であり、そのことが製図のような独特の作風を生み出している点に興味深い。

さらに本展ではいくつかのルールを拡張し、言葉や他者を介した制作やワークショップを行っている。その実験から明らかになるのは認識や表現の多様性であり、コミュニケーションの奥深さだ。

客観的、論理的なプロセスを経て自らの表現を交換していくという堀川の試みは、今後どう展開するのか。大きな可能性を感じさせる。

（西宮市大谷記念美術館 学芸員 池上司）

- ・ enocoニュースレター05号「展覧会&イベントレビュー」（2015年4月発行）

執筆者：三井知行（大阪市美術館建設準備室 学芸員）

## 展覧会 & イベントレビュー

三井 知行

大阪新美術館建設準備室学芸員。  
1968年青森県八戸市生まれ。原美術館とその分館のハラミュージアムアー  
ク勤務を経て、2002年より現職。

enoco [study?] #2 展覧会

### 堀川すなお 解釈と行為 SEEING AND PRACTICING

(2015年1月10日～1月24日)

巨大な作品、壁を埋め尽くす数の絵画や床に溢れるオブジェといった、見る者を圧倒する展示がある。そのとき心に聞こえてくる音はどんなものだろうか。鬼気迫る激情を訴える展示なら、大瀑布や荒波のような音かもしれない。一方で、群衆が一斉に囁いているような、または枯葉を踏んで歩くような、ひそやかだが複雑な音のこともあるだろう。enoco[study?] #2における堀川すなおの展示は、まさに後者の典型であった。

壁一面に貼られた数多くの「作品」は、そのほとんどが青色鉛筆による精緻な線描で、離れて見ると青い薄霧のようにも、細かく青い壁のヒビのようにも見える。作品の多くは、作家が独力で制作したものではなく、ワークショップや対話といった他者とのコミュニケーションの中で制作されたものである。

堀川すなおは「目の前にあるものを見て理解する」という、日常的で無意識的な行為に意識を向け、そのものの「本来の姿」について探求する。哲学的と言えるその探求は、しかし言葉だけではなく、科学のように実験、観察、そして描画と、手と目を介して行われる。

これまで主に一人で探求を積み重ねてきた堀川が、やがて他者（の認識）とへと意識を向けるのは当然の成り行きであり、「他者に対してひらいていくこと」で「アートの可能性」を研究(study)する本プログラムは、まさに渡りに船だったようだ。

プログラムではアトリエ公開やワークショップが行われたが、アトリエ公開は単なる中間発表ではなく、訪問者と対話し、時には簡単なワークショップを行う研究の場として機能していた。ワークショップに至っては、ワークショップとは何か、リサーチするところから始めている。

これら他者の介入する制作に共通しているのは、対象物について、言葉による外見の「説明」、ものを見て得られる「視覚情報」、その「名称」の3つのうち、1つあるいは2つの情報だけで制作が行われる点である。例えばホッチキスを描くのに、形のみを説明した言葉をもとに描く場合と、その説明にホッチキスであるという情報を加えて描く場合、直接目で見て描く場合の3つが対比される。こうして得られた数多くの描画は、もはや作家個人の作品ではなく、また、作品というよりむしろ実験結果というべきものである。

しかし、それらを一堂に並べた成果展を見れば、作家の探求に対する答えが得られるわけではない。むしろ作家の問いは、他者の介入でより深く複雑なものになっている。研究(study)することによって問い(=?)が深まるというのは、[study?] というタイトルに対して出来過ぎの感があるが、丁寧に個々の作品を見ていけば、この問いが知的な楽しみに満ちたものであることに気がつくはずだ。



展覧会風景  
photo: Takuma Uematsu



展覧会風景  
photo: Takuma Uematsu



アトリエ公開・中間レビューの様子  
(2014年11月29日)



## 今回の enoco[study? ]#2 で得たこと

“他人の目線に立って対象を見る”という当初の計画を実行する際に、今回の一番の発見は言葉を用いるという過程を得た事である。ワークショップ前は、対象を目で観察し見たものを描き写すということを行っていた。しかし今回は、目で観察した事や手で触れた感触を一度言葉で書き、最終的にその言葉を読んでもものの形を理解する事を試みた。言葉を用いた事で、普段私たちの会話でなされている言葉による曖昧さや解釈の仕方を取り入れる事ができた。これは今まで、ものの名前と対象の観察記録を提示する中で行ってきた、ものと名前の曖昧さを、今回は言葉を用いて描くという制作時の過程からも考える事ができた。

## 今後の発展

今回のワークショップでの応用として、今後同じ内容でも言語が変わればどのような捉え方の違いが見えるか、時間を置くと同じ言葉の捉え方が変わるのかをより深く探りたい。そして2015年の5月からポーラ美術復興財団の助成金を頂き1年間、人種のるつぼであるニューヨークにて滞在をさせて頂く事となった。ニューヨークでは今回の enoco[study? ] で得たことを、人種や言語の違いからより深く考察する事を試みる。そして日本という様々な物事を受け入れ自らの文化に取り入れてきた民族として、他人のものの見方を理解すること、そしてそれを解釈し理解しようとする事とはどのような事なのかを、個人の好奇心だけにとどまらず歴史的な背景を学び、再びその学びも制作に取り入れることを考えている。

今回の enoco[study? ] で他者と関わり制作を行う経験をさせて頂いた事、そして言葉を制作に用いるということに気付いた事、この2つのことは今後凄く私の制作の糧になり物事を考える一要因になりうると思う。